

The background of the entire page is a repeating pattern of pink, stylized leaves or petals, resembling cherry blossoms, arranged in a dense, overlapping manner.

特別な配慮を要する学生への対応

ハンドブック

(教職員用)

2018年改訂版

相愛大学保健管理センター

1. こんな学生いませんか？

身体、精神（心理）、発達のいずれかの障がいがある学生や、それらが疑われる学生では、特別な配慮が必要です。また、心身共に不調であり対応に困る学生、様子が気になって相談やサポートが必要であると思われる学生にも配慮が必要になります。

実習 実験

- ・実験の手順が理解しづらい
- ・グループでうまく協同できない
- ・実習先でトラブルを起こす
- ・臨機応変に動けない
- ・同じミスを繰り返す

講義

- ・突発的な外れな質問をする
- ・急な変更で固まってしまう
- ・ソワソワ、キョロキョロしている
- ・提出期限を守れない
- ・科目履修の管理ができない
- ・発表時、極端に緊張する
- ・板書が見えづらそう
- ・耳が聴こえにくそう



対人関係

- ・いつも一人でいる
- ・サークルや級友と頻繁にトラブルを起こす
- ・いつも同じ質問をしている
- ・場の雰囲気や相手の意図がよめない
- ・暗黙のルールが分からない

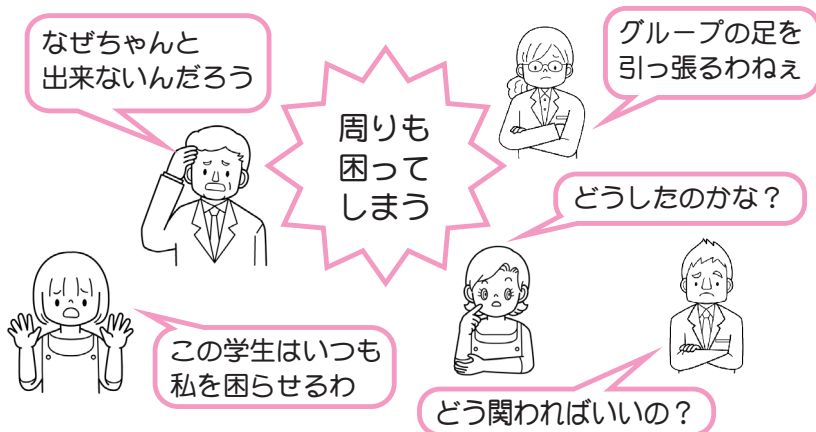
就職

- ・どのような職業に就きたいのかはっきりしない
- ・自身の適性がわかっていない
- ・現実的でない職業を希望する
- ・面接でいつも断られる

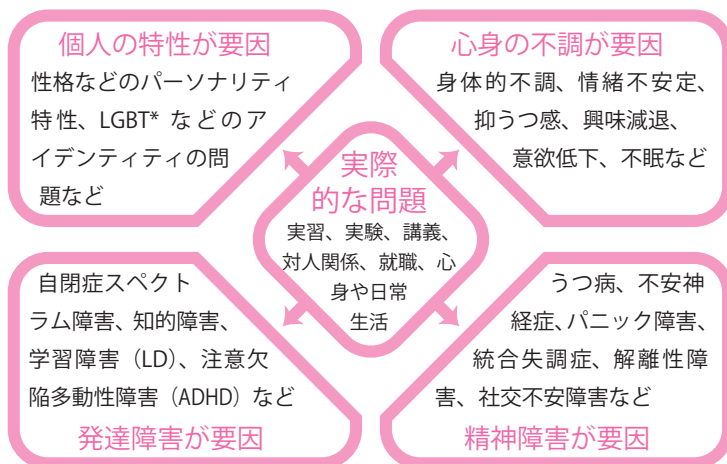
心身や日常生活

- ・感情の起伏が激しく、不安定
- ・ものごとがうまくいかないとパニックになる
- ・混雑した電車に乗れない
- ・手洗いや鍵の確認がやめられない
- ・長期の欠席や急激な成績低下

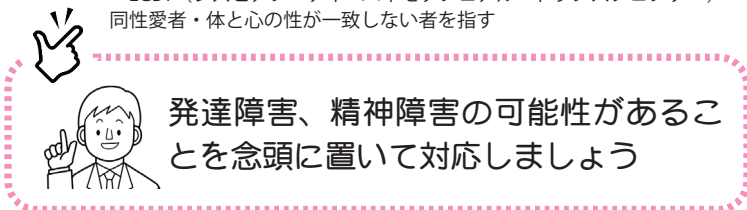
学生は、様々な問題行動を通して
私たち教職員に訴えかけています



こういった特徴は多かれ少なかれ誰にでも当てはまることです。しかし中には発達障害が関係している場合や精神的な病気のシグナルである場合があります。様々な可能性を考えて対応することが重要です。



*LGBT (レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー) 同性愛者・体と心の性が一致しない者を指す



2. 大学でなぜサポートが必要なのか？

これまでは

大学は主体的に学ぶ場
だろう

余計なおせっかいじゃ
ないか



学生の自己責任だ！

子どもじゃある
まいし

多くの学生が単位を取得していくのに、
要求水準に到達できず単位を落とす学生に
サポートが必要なの？



現在の基本姿勢



“入学を許可した” = “学ぶ権利を授与した”
私たち教職員は、学生の成長に関与する責務を
負っています。

学生が卒業するとき、主体的に希望をもって社会の中で自立できるように、教職員全員でサポートしましょう。相愛大学の学生を、自信と責任をもって社会に送り出しましょう。

3. サポートに関わる基本理念

障がいのある学生が、他の学生たちと格差なく学生生活をおくるための研究が進んでいます。心身に障がいのある学生には、どのような「特別な困難」があるのか、どうしたら解決できるのか、その基本理念を考えてみましょう。

障がいのある学生への支援は、大学の使命

インクルーシブ（障がいを区別しない）教育に基づく

① 障がい者施策の動向

2004年 発達障害者支援法「状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする」
2006年 障害者権利条約国連採択「あらゆる段階におけるインクルーシブ教育制度の確保」
2013年 障害者差別解消法「障害を理由とする差別を解消するための合理的配慮」

② 共生社会における大学の責任

大学においては、障がいのある学生を受け入れて修学のために必要かつ適切な支援、障がいのある学生の自立および社会参加に向けた支援を行う
2017年「相愛大学障がいのある学生への支援に関する基本方針」を制定した

③ 障がい者のための必要かつ合理的配慮

障がいのある学生が修学を達成するための、個々の状態やニーズに応じた具体的な対応策

- 施設、設備のバリアフリー化
- ユニバーサルデザインの視点
- 個別的なニーズへの対応

いまや、私たち大学教職員は、
研究者・教育者・管理者だけでなく

大学教職員 = サポーター



4. 教職員のだれもがサポーター

学生に適切に接するための具体的なスキル

Step1 注意深く見守る

「Aくんは、今日も元気そうだ♪」
「最近、Bさんの顔を見せないな」
「Cさん、今日、初めて対応したけど、覚えておこう」



私たち教職員は、学生たちと接する機会が多くあります。窓口業務や授業だけでなく、校内の移動中なども。そのとき、学生に“目を向ける”ことが大切です。

Step2 気づきを大切に

「あれっ？いつも元気なAくんらしくないなあ」
「Bさんどうしているのか、病気のかなあ」
「Cさん、本当は別に困っていることがあったのかな？」



学生の様子の変化に“疑問”や“違和感”を感じる、その感覚が大切です。



SOSのサインに気づこう！



学生からのSOSは、私たち教職員に、“どうしたのかなあ”や“何かおかしい”と気づいてもらうために出しています。“困った学生だ”、“面倒な学生だわ”と思われるかもしれませんが、その時こそ学生は、サポートを求めています。

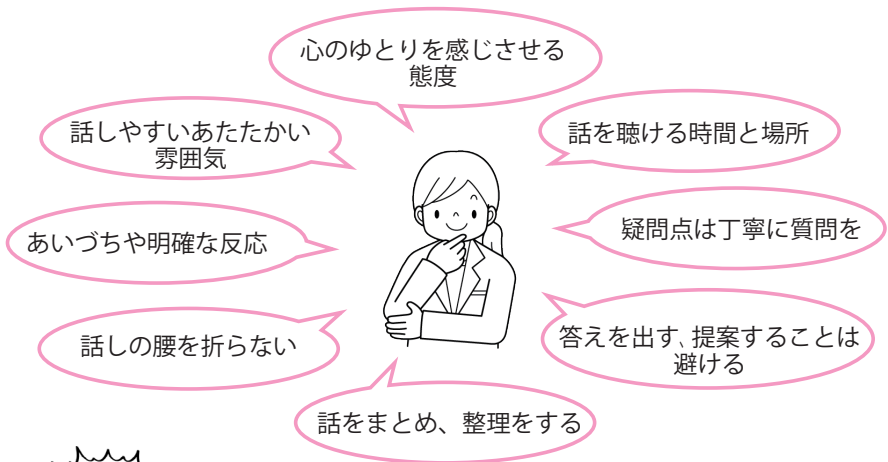
Step3 話を聴く

「Aくん、最近頑張りすぎてるようだけど、大丈夫？」
「(学生の所属学科の先生) Bさんから連絡はありますか？」
「Cさん、解決したかな？他にお手伝いできることない？」



学生のSOSのサインに気づいたときに、いつも気にかけて関心を寄せていることを、学生1人ひとりに伝えることが大切です。そして、その学生が本当に困った時に、じっくりと話を聴いてあげましょう。

上手く聴くテクニック



注意!

- ・慌ただしさや忙しさを感じさせるような態度
- ・早口、詰問調で、知りたいことを質問ばかりする
- ・人の出入りが多く、見られるような場所
- ・学生の話途中で切り上げてしまう態度
- ・意見や考えを理解せず、見くんだり、説教をする

5. 学生サポートのための連携の重要性

ひとりでサポートするわけではない

Step1 学生に応じたサポートをイメージする

「Aくんは進路のことで不安がいっぱいだった」
「Bさんは体調不良で登校しづらいんだな」
「Cさんは根本的に問題を解決できていなかった」

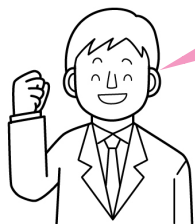
学生の悩みや不安がわかれば、その学生がどのようなサポートを必要としているのかを想像することが大切です。



Step2 サポートはチームで

「Aくんは進路かぁ、相談にのれるけど、学生支援センターを紹介してあげよう」
「Bさんの体調不良の原因は何だろう？保健室の看護師さんに相談してるのかな」
「Cさんは精神的に大変だな。学生相談室を紹介してみよう」

学生のサポートは、役割と責任を分担しましょう。ひとりで抱え込まずに、チームでサポートをすることが大切です。



より良い学生サポートのために

- ・自分ができる範囲を明確に理解しましょう
- ・サポートをつなげた後もフォローや支援をできることがあります
- ・サポートの輪を広げよう
- ・サポートの輪を強化していこう

チーム・サポートの実際

“あなた” からつながるチーム支援
- Aくんの場合 -



Aくんに
違和感を感じた
あなた

あなた「最近頑張りすぎてない？大丈夫？」

A「進路が不安になって・・・」

あなた「やっぱり、学生支援センターへ相談に行ってみる？」

A「行ったことがないので行きにくいです」

あなた「連絡しておいてあげるよ」

A「それなら、行ってみます」

あなた「また近況を教えてね」

あなた「Aくんが、進路の悩みで調子を崩しているのを話を聞いてあげてください」

職員「わかりました。就職なら相談にのれますので会ってみます」

学生支援センター
職員

職員「Aくんが、進学か就職かを決められず悩んでいるので話を聞いてあげてください」

先生「そんなんですね。様子がおかしいと思ってたんです。私から話しかけてみます」

所属学科の先生

先生「私のゼミ生のAくんが、進路の悩みで精神的に疲れているようで、カウンセリングを希望していますのでお願いできますか？」

カウンセラー「プレッシャーを感じているのでしょうか。わかりました」



Aくん

保健室看護師

カウンセラー「Aくんが、体調面も良くないので、お願いできますか？」

看護師「わかりました。どのような面で調子が悪いか話を聞いてみます。」

学生相談室
カウンセラー

Point

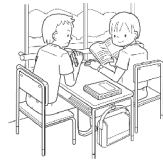
- ① ひとりでも多く、チーム・サポートの一員として集まる
- ② チーム全員が学生から聴いた情報を交換し、整理する
- ③ チーム全員がお互いの方法を尊重し、責任を持ち、サポートを続ける

6. ケーススタディ

Case 1

Aくんは時間管理がうまくできず、授業や試験に遅刻したり、行くこと自体を忘れてしまうことが多い。また、授業中に教員が言ったことをすべてメモするので、後でノートを見返すと、自分でも何が重要か分からない。そのため、筆記試験でも点数が取れずに単位を落としてしまうことが続いた。

相談を受けたカウンセラーは、スケジュール帳や携帯電話のアラームなどの使い方を指導した。このことを家族に伝え、家庭で引き続き指導できる体制を整えた。また、ノートのまとめ方などは教員が指導することになった。試験の前日や当日は、試験開始時間を本人が忘れないように、家族が繰り返し注意を促すことで遅刻を防ぐようにした。



Case 2

Bくんは真面目に学業に取り組み優秀な成績を修めていた。しかし、2回生になった5月中旬から大学に来れなくなり授業の欠席が続いた。Bくんからも何の連絡や相談もなかったため、教員がBくんの欠席状態に気づいたのは6月中旬になってからだった。そこで、Bくんへのサポートを考えるようになった。

教員は、まず教職員間でBくんについて情報共有した。そしてすぐにBくんに連絡を試みたが連絡がつかず、そのためBくんの保護者と話し合い、安否確認をした。その話し合いから、2回生になり学業に困難さを感じていたことが把握できた。教員は、Bくんの学業の困難さを理解しようと個人面談をし助言を与えた。また、精神面をサポートするため学生相談室の予約をいれた。



Case 3

Cさんは地方から大学に進学し、一人暮らしを始めた。大学にうまくなじめず、いつも一人で過ごしているようだ。次第に授業を休みがちになっていたが、後期が始まると全く授業に出てこなくなった。教員がCさんと保護者に連絡した結果、下宿で引きこもっていることがわかった。

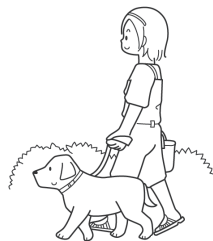
教員がCさん、保護者と話し合い、学生相談室のカウンセラーに相談することを勧めた。カウンセラーとの話の結果、近くの心療内科を受診、抑うつ傾向があると診断された。そしてその結果を、Cさんと保護者は、保健室を通して診断結果を学内で共有してもらい、配慮を要する学生として対応してもらうことにした。現在は、病院から処方された薬を飲みながら、大学では学生相談室でカウンセリングを継続している。



Case 4

Dさんは女性として育ってきたが、物心ついた頃から男の子が好むような遊びが好きで、自分が女性として扱われることに心の中で違和感があった。その違和感は思春期に入ると強まり、女性らしさを周囲に求められることが非常につらく感じられるようになった。ある日Dさんはこの悩みを教員に打ち明けた。

Dさんの具体的な悩みは、女性用トイレを利用しづらいことや、体育の授業の際の着替え場所に困っているということなどであると、教員に打ち明けられた。学生支援センターと情報を共有し、すぐに対応できそうなところから改善していくことになった。また同時に、性への違和感については学生相談室で継続的に話をしていくこととなった。今後は、両親も交えて話し合いを進めていく予定である。



7. 身体に障がいのある学生に対する配慮

障がいをもつ学生が、他の学生と同じ様に授業を受けるためには、必要に応じた対応と配慮が必要です。実際サポートを行う際は、障がいのある学生と共にサポートについて考え、その学生の自立と大学として配慮すべき部分を調整することが大切です。さまざまなケースの配慮例をご紹介します

Case1 視力に障がいがある

- 板書は、はっきりした色で、できるだけ大きめの文字で書く
- 板書した内容の読み上げや資料の文字を拡大する
- 提出物などは、記入する幅を広くしたり、罫線を濃くする
 - パソコンでの提出物作成や代筆したものを提出させるなどの代替方法の検討
 - 声をかけるときは、前から近づき自分から名乗る
 - 普段から、「通行の妨げになるものを置かない」、「普段使用しているものの位置を勝手に変えない」



Case2 車椅子を使用している

- 会話は、できるだけ同じ目線で行う
- 事前に車椅子の構造、介助方法を確認しておく
- 日頃から通路にはできるだけ物は置かない
- 体圧分散のための臥床できる場所を提供する



Case3 杖を使用している

- 床や廊下は、水などで濡らさない
- 周りを走らない
(追い越すときなどスピードに注意する)
- 段差がある場所は、わかりやすく目立つ
掲示をする



Case4 聴覚に障がいがある

- 音声だけで話すことは極力避け、ジェスチャーなどを交える
- なるべく前を向き、はっきりとした声でゆっくりと話す(資料やマイクで口元が隠れないように)
- 構内放送等は、掲示や配布物などを用いて視覚的な情報を併用する



Point

災害などの非常時に、特別のサポートを必要とする学生がいることを踏まえて具体的な対応を計画し、避難訓練を実施することも大切です。

8. 相愛大学のチーム・サポート

私たちが所属する相愛大学は、比較的小規模な大学です。小規模校だからこそ持っているメリットを活かしていきましょう。



Strong Point

私たち教職員は、一人ひとりの学生に接する機会に恵まれ、サポートを必要とする学生にきめ細かいサポートができます。そして、お互いに顔見知りなので、教職員の間でも人間関係を作りやすく、お互いにチーム・サポートを働きかけることができます。

9. Question & Answer

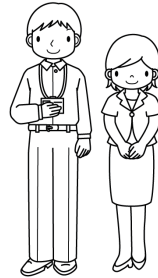
Q. 実際にチーム・サポートするにはどう集まるのですか？

A. 私たち教職員は、それぞれが担っている役割があります。サポートができる関係者は、声をかけ合うことができます。まずは、気を張らずに電話や電子メールで連絡を取り合うことから始めていきましょう。



Q. サポートチームで共有された情報を扱う上でどのような注意点がありますか？

A. 私たち教職員はそれぞれ守秘義務があります。学生をサポートする上で、チームでの情報共有は必須となってきますが、これは情報を共有することで学生のサポートに有用になるという考えのもとに行われます。「相談室の先生から聞いたけど・・・」というように対象学生に情報が共有されていることが伝わってしまうと、学生との間の信頼関係が壊れてしまう危険性があります。チームで共有された情報の扱いには十分に注意しましょう。



Q. つなぐって、他の教職員の仕事を増やすことにならないですか？

A. 増やすことにはなりますが、まず、私たち教職員が全学的に連携をして学生サポートに努めていくことを認識しましょう。実際に、あなたが学生の様子の変化に気づかれたことは非常に大切なことです。それを学生のためにサポートをつなげましょう。お互いの役割を尊重し、“仕事の壁”を低くしていきましょう。学生のためにサポート・チームワークが最も大切です。また、私たち教職員のメンタルヘルスも非常に大切ですから、一人で抱え込まずに、周囲に助けを求めましょう。



Contents

1. こんな学生いませんか？
2. 大学ではなぜサポートが必要なのか？
3. サポートに関する基本理念
4. 教職員のだれもがサポーター
5. 学生サポートのための連携の重要性
6. ケーススタディ
7. 身体に障がいのある学生に対する配慮
8. 相愛大学のチーム・サポート
9. Question & Answer

発行：相愛大学保健管理センター

大阪市住之江区南港中 4-4-1

TEL：06(6612)5932

発行日：2018年10月1日